

子どもたちの地図と大人たちの地図

荒木 一視 (山口大学教育学部助教授)

「まち探検」と称して小学生の娘が校区の地図を作るという。半日かけてクラスで分担して校区をまわらしく妻も引率補助で出かけた(引率は娘とは別グループ)。帰ってきて話をするに、引率の子どもたちの興味はその辺にはえている植物や小動物にどんどん引き込まれていき、生態学を勉強している彼女にとってはとても楽しかったらしい。その他にも子どもの興味の対象は、「ここボクのうち」「あそこは〇〇君のうち」「ここには大きな犬がいる」「ここのおばさんは怖いからそーっと通ろう」などなどワイワイにぎやか。目的地の神社に着くとまた大変。あっちの木やらこっちの木やら、脇を流れる小川やら、いっぱい楽しい発見をしたらしい。

できあがった地図には学校と神社とそれを結ぶ道沿いで発見したカエルやヘビやの小動物と妻が説明したらしいいわゆる「雑草」のちゃんとした名前が並んでいた。また、神社をはじめ途中で農家のおじさんが話してくれたようなところでは沢山の情報がでてくるけれどその他のところはすっきりと白い。私は楽しそうな探検の様子を想像して思わずほほえんだけれど、どうも学校ではこうした地図は期待されていないらしい。ではどういった地図が期待されているのかというと、どうやら道筋と交差点と、郵便局や銀行、役場、橋などのランドマークがきちんと書き込まれた地図らしい。

なるほどなあ。そういう風になっているのだなあ。小学校ではそういう風に教えているのだなあ。としみじみ。もちろん学校のそうした地図学習を否定するつもりはない。そういう学習を通じて地図を使えるようになっていくのであろうことは否定しない。しかし、そういう学習を通じて子どもたちの頭の中からは子どもの地図が消えて、大人の地図に変わっていくのだ。

郵便局や役場や橋などは確かに大人の使う地図では重要なランドマークである。でも、子どもたちにとっては役場なんてただの四角い建物でしかない。それよりもこの前へびを見つけた場所の方がずっと大切なのである。まだまだ漢字を習う途中にある子どもたちにとって、銀行なんて字は読めない(時に銀行という字の上には「三菱東京UFJ」とか「三井住友」とか意味不明の言葉が並んでいる。いよいよ関心など持たない)。それよりも、道ばたに咲いた小さな花やアリの行列を追っかける方がずっと楽しい。子どもは橋を橋として認識するわけではない。そこは川が流れていておもしろいものに会える場所、見通しが開けて眺めのいい場所として認識するのである。それがない橋は橋ではなく単なるそれまでの道路の延長でしかない。

実際のところ友人の調査では興味深い結果が得られている。同じように学校から家までの道のりを地図に描かせたところ、低学年では犬や猫などの動物、あるいは植物、友達の家、派手な看板、変わった形の屋根などが地図に描き込まれるが、高学年になるほどこうした情報は減り、かわって郵便局や裁判所などといった大人の地図記号、ランドマークが多くなっていくのである。しかし、本職の地理学者としての立場からいわせてもらうと、決して大人(あるいは学校の先生)が学ばせようと思っているものだけが地図なのではない。5万分の1とかの地形図だけが正統の地図ではない。もちろん、地形図の勉強をするなどといったわけではない。ただ、その過程で小さい時に持っていた大切な観察眼をなくさないで欲しいのである。むしろ学校の先生にはそれをさらに発展させていってほしいのである。そうすればきっとどここの教科書にも載っていないようなすごくおもしろい「まち探検」地図ができるはずである。